

翻刻
『敵討猫魔屋敷』

尾道市立大学
芸術文化学部
日本文学科
七期生

有村 惟代

指導教員

藤沢 毅

■底本略書誌

『敵討猫魔屋敷』

振鷺亭主人作・蹄斎北馬画。

底本 国立国会図書館所蔵本 (208 - 689)。

中本、一卷一冊。全四一丁 (広告丁一丁を含む)

文化五年 (一八〇八) 刊。

江戸・上総屋忠助、村田屋治郎兵衛。

表紙は赤茶色。空押しで立湧に唐花模様。

題簽 左辺双郭「敵討猫魔屋敷 全」

見返しなし

文化四年二月自序。

跋 (署名、年時なし) あり。

刊記

「文化五年春正月

振鷺亭主人 著

蹄斎北馬 画

東武／書肆

通油町

村田屋治良兵衛

日本橋新右衛門町

上総屋忠助 「

広告丁一丁

「戊辰新版 慶賀堂藏」として、表に「巷談坡隄

庵」ほか計六点の書名、裏に「古今奇談紫草紙」

ほか計一〇点の書名が挙がる。

*なお、国立国会図書館本 (208-165)、関西大学所蔵

本 (中村幸彦氏旧蔵本、国文学研究資料館蔵マイク

ロフィルム《ナ2-127-4》による) を参照した。

*翻刻、ならびに扉や口絵等の画像転載は、国立国会

図書館のデジタルコレクション (インターネット公

開。保護期間満了) による。

■梗概

(犬の恩) 大坂長町に紙屑買をなす阪助が妻の直と暮らしていた。直の出産後、飼っていた三毛猫が猫又になり、直の喉を噛み切り殺す。生まれた赤子は飼っていた犬の乳により育つ。阪助は、五右衛門町で若侍から買った紙屑の中から一〇両の金を見出す。返却に向かうが、その武家は転居していた。その金を狙い、鼠忠治は毒入りの牡丹餅を阪助に送る。

(鼠の偷^{ぬすみ}) やはり一〇両の金を狙い、隣家の願西は縁の下より阪助の家に忍び込む。吠えかかった犬を殺した願西は、牡丹餅を食べ毒死する。忠治は鼠の妖術を使い、捕り手から逃れる。犬の乳によつて成長した子は犬太郎と名づけられ、病んだ阪助に孝行をつくす。阪助は犬太郎に、母親の敵討ちと、反故紙の「讃州寒川郡小豆島」との書き付けを頼りに一〇両の金を返却することを遺言として頼み、亡くなる。犬太郎は、堺に住む兵法者の万人敵見竜^{ほうろくびやけんりやう}の家に奉公し武芸を習う。犬太郎は一五歳になり、奉

公を辞し、父の遺言を果たすべく四国に渡る。手がかりなく、備前の児島が崎にて痛めた足の保養をなす。痛みを治癒する潮があると騙された犬太郎は、縛られ海に落とされる。

(猫の仇) 海中で縄が切れた犬太郎は、讃岐国寒川郡小豆島に流れ着く。ある屋敷の下僕に助けを求めるが、その下僕はかつて一〇両を紙屑とともに売ってしまった侍であった。犬太郎の体は小豆粥によつて快癒する。その屋敷に盗賊が入るが、主の婆は盗賊を見出し、捕縛させる。その盗賊は犬太郎を海に落とした男であり、また鼠忠治であった。犬太郎は忠治を尋問し、母親の敵が猫又であり、この家の婆であることを知る。犬太郎は戦いの末、猫又を倒し、元の主が既に殺されていることを見出す。領主である菊池兵庫頭により武士に取り立てられた犬太郎は、八角正昭^{はっかくまさてる}と名乗り、大友合戦に名譽を現した。

■凡例（翻刻の方針）

- ・翻刻は扉からとした。口絵は図版でも示した。
- ・平仮名は現行の対応する平仮名に統一し、また、漢字も基本的には現行の書体に統一した。
- ・振仮名は底本にあるものの中で、現在我々が読むのに必要あるいは便利と思われるもののみを付した。左訓は《》に入れて示した。
- ・踊り字は「々」を除き、全て開いた。
- ・私に句読点や濁点、「」、『』を補い、また私に段落を設定した。
- ・割書は「」に入れて、それを表した。
- ・私に文字を補った場合は「」に入れて、それを示した。
- ・明らかな誤記、誤刻も基本的にはそのままにした。ただし、意味が不明瞭になるものについては、その語句の右あるいは下に正しいと思われる文字を（ ）に入れて示した。
- ・近世期に混用されていた次の文字については、そ

の意味に合わせて置き換えた。

吊 ↓ 帛 掾 ↓ 縁

脊 ↓ 背

・また、以下の文字については次のように置き換えた。

嫗 ↓ 房

■ 翻刻

【扉】

(印「醉中灯下」)

得失榮枯總デ在天

機関《カラクリ》用ヒ尽スモ也タ徒然《ムナゴト》

人心不レ足鼠吞ミ猫

世事到《ラツマリ》頭猫捕フ犬

何当共剪西窓燭

却語巴山夜雨時

(印「家」) (印「貞居」)



【扉】

【序文】

復讐猫股屋鋪 自序

唐の高宗きさきの後ご、武昭儀ぶしやうぎ、妬ねたんで蕭淑妃しやうしゆきを殺す。
猫ぶと鼠しやうは武と蕭れんこんとの靈魂れいこん、化くわして、鼠は猫の為に
製せい(制)せらるるとかや。されば猫と鼠は陰獣にして

瀬悪たり。特、狗は陽獣にして剛なり。艮の卦に象る。
 那兎と狸の仇討は迦痴羯山に事ふりたれど、一番ひ
 ねつてあたらしく、仇を抛大蓼の、作者もちつくり
 髯束菖、鼠の中から下に徹、またやんごとなき方の御
 伽策子ともなりつ。猫に中金の益なきにあらずと、犬
 奔のはしりがきに、猫のちよつかひ、ちよつくらち
 よつと。福鼠の上忠がちう本となし、慶賀堂に 寿
 て辰の春の新版とはなしけらし。
 文に化す四の年、如月のころ

中武蔵浅草の隠士

振鷲亭主人

筆を金竜山下の僑居に操る

(印「振鷲亭」)

【口絵 1】
八角犬太郎政昭像

為人義機 威風凜々 面色如玉
 身長六尺 容貌魁偉 皮膚肥白
 胆氣如烈 火時年紀 十有五歳



【口絵 1】

【口絵2】

○犬の恩

難波の阪助、孤子を手飼の犬に托して乳汁をふくめさせ、佳食を与へてその恩を酬ひ、遂に奇児犬太郎を

生育するの図

伐析羅大将、本地得大勢
戌ヲ司トラセ給フ神ナリ。

【口絵3】

○鼠ノ儔

鼠賊夜叉神之像

北方之魔神也。恒毘羯羅大将所降伏。

盜賊鼠儔二

主夜神呪曰「婆珊婆演底」

此呪ヲ唱レバ、鼠賊神、障導ヲナサズト云々。



【口絵2】



【口絵 3】

【口絵 4】

○猫の仇あだ

於「讃州小豆島」、八角犬太郎、討「猫魔」
 奉「讃州象頭山金比羅大権現」懸絵馬

東都 蹄齋北馬画 (印) (印)

【絵 (慶賀堂蔵)】

慶賀堂蔵



【口絵4】



【口絵5】

【本文】

敵討猫魔屋敷
かたきうらねこまたやしき

振鷺亭主人 著

○犬の恩

「高台于升而見則煙起民之竈者贍（賑）爾兮里」と、仁徳天皇の御製にて、難波の都は往古より繁花の地とぞしられる。

爰に、摂州大坂長町のうら借家に阪助といへるものあり。生得篤実にして正直の頭をやどる紙屑買を世の営となして、稼におろかなけれども、とかくふしあわせにて、妻も雇れしごとなどしつ、夫婦貧しく暮しける中に、妻のお直、懷妊して、殊更難産にのぞみ、阪助も家業をやめて朝夕に飯米を尽しければ、七夜のうちながらも又紙屑買にぞ出にける。妻は夫の留主を待侘てひとりこころ細く、我身の悩にとりそ

へて乏しき事もかたれつ、産し赤子を掻抱き、添乳の手枕にうつらうつらと睡みたりしが、誰やらん、「起よ、起よ」と揺覚すものあり。お直、幻心に聞ば、さもしわがれたる声にて、

「我貌を見よや、見よや」

といふに目を覚しけるに、こわいかに、日頃可愛つる三毛猫、その丈五尺余となりてすつくと立しが、尾は二股に割れたるを閃し、口、耳もとまで裂け碧玉のごとき眼を怒してはたと睨つけたる怖しさ。お直は一目見より、「叫」といふて、絶入ながらも外面の方へ逃出んとせし処を、件の猫、早くもお直が喉咽に噛ついて、ただ一口に喰殺しぬ。此時、あたりとなりの者ども、皆稼に出ける留主なれば、誰あつて知るものもなかりける。

夫、阪助も斯とは神ならぬ紙屑買に出しかど、虫が知らすか何となく我家の事の案じられ、いつよりも早く立帰りけるに、妻は血に染て打倒れみたり。『こわいかに』と見るに、はや喉咽は剥とられたるごとくな

れば、何かは息のかよふべき、あへなき死骸を見るよりも、阪助、半狂乱のごとく立つ居つ身を悶へ、無念骨隨に徹て歎きけるぞ、理なり。

相借家のものどもも集りてさまざま會議すれども、何者の所為とも知れがたく、

「先はむまれ子の無恙を末のたのしみとなすべし」とて阪助をいさめ、妻の亡骸はその夜、千日に送りて無常の煙となしにける。

さても阪助は妻にわかれしかば、忽ちひとり心ほそき身となり、七夜の悦び引かへて初七日の連夜となりけれども、乳飲子にかかりて此ほどかせぎにも出ざれば、はや一銭の貯もつきて、何を仏に供すべき手段もなく、我身の哀はさる事ながら、子は乳にはなれて瘦ほそり、昼夜なく事、さらにやまざれば、そのいぢらしさ、親の身にとりていかばかりならん。坂助、糧に尽たるはかなしからねども、我子の乳に飢るを見ては胸を裂てもあたへたく、誠に血の涙をながし、かの焼野の雉子の雛を育む風情にて、あわれはかな

き有さまなり。

さても又、阪助は日ごろ斑の女犬を飼つけしが、何によらず自分の食物をわけてあたへ、殊の外にふびんがりければ、彼犬は尾をふりたてて阪助が出入を慕ひ、昼夜門口をはなれずして、年ごろ居なじみたりしが、此ほど孕たるやうすに見へければ、阪助、ひとしほふびんにおもひ、我家の縁の下に入置けるに、此犬、妻のお直と同日に産しけり。

然るに阪助が妻はみまかり、犬はやすやすと縁の下にてうみおとし、七、八隻の子犬に乳をふくまする有さまを、阪助つくづくと見あたりしが、頗にうらやましくなりて、犬に對て云けるは、

「斑よ、あなたが子は乳ありてしあわせなれども、我子を見よ。母は非業に死て乳にはなれ、如此に瘦ほそりたれど、我身貧しくしてさと子にやるべき事はさておき、折あしく近辺に乳をもらふべき家もなければ、今は見ごろしにするより外なく、我もかせぎに出ずして、かくては飢て死ぬべきなり。我、死ぬるはいとはねど

も、いかにしても我子ふびんなり。さりとして談合すべき相手もなく、年久しく飼ぬる三毛猫さへ、我貧しきを見限りて、何地行けん影もなし。誠に『猫は三年飼れて、ただ三日のおんを知り、犬は三日飼れて三年のおんをしる』とむかしより言伝たれば、犬は義をしるものぞとよ。斑よ、你と我とは年頃久しき馴染にて、我ゑんの下にすまへば、則、我家の者なり。いかに此せつ、我をすくふと思ひて、一つの願をかなへくれまじきや」

と真実にいひければ、彼犬、会得なしたるやうすにてひたすら頭を点しければ、阪助、
「さては聞とどけしにや。先、忝し。されば、空を翔る鳥、地を走る獣も親子の情をしるといへば、いかに、おのれが乳を我子に飲せくれまじきや。さすれば我子もおいたつべく、我もかせぎに出なば、親子が露命をもつなぐといふものにて、誠に命の大恩なるぞよ」

と、ひとへに人間に語るがごとく、ひたすら「憑、憑」

とて、涙とともに手を合わせければ、彼犬、畜生たりといへども阪助が感激のこたばを聞わけたりけん、乳にすがりゐたる子犬をおしはなして縁の下をはい出しが、やがてのかのかと畳の上にあがり、そのまま赤子の傍によりて横に臥たり。そのさま、偏に「乳をふくめよ」といはぬばかりのありさまなれば、阪助、『さてこそ』と思ひ、泣ゐる我子をさし出し、犬の乳房にあてごふに、子は忽ち泣やみて、すらすらと乳汁を吸けるぞしほらしき。阪助、かかる殊勝の有さまを見て、今さら奇異の思ひをなしつれども、此事、人にも語らず、やうすをためし見るに、其日よりして、彼犬、よるひるとなく時々縁の下よりはひ出て、かたのごとく乳を含る事、さらに人間の母子に異ならざれば、阪助、一段の苦勞を休めて大ひに喜けるぞ、理なり。かくて半月あまりも過けるに、ある日、縁の下、俄にさわがしく、子犬どもおびただしく泣叫ぶそのこゑ常にかわりて、『何事にや』と阪助、縁の下を見やりけるに、彼犬、七、八隻の子犬を残らず嚙ころし

けり。阪助、大ひに呆^{あはれ}はてて見る所に、彼犬、つかつかと畳の上にあがり、阪助が子に乳^ちをふくめしが、いつにかわりて打しほれ、首^{かしら}を挽^{うな}れてぞあたり。阪助、「無慙^{むざん}の事をなしつるよ」と咤^{しかり}（叱）つつも、『何ゆへにか、おのれが子を囓^{かみ}ころしけん。畜生のあさましさよ』

と思ひゐたるに、その時よりはや縁^{えん}の下にふつつと入らざりければ、阪助、心つきぬるは、

『扱^ちは乳^ちほそりて育兼^{そだてかね}るゆへ、おのれが子を殺して我子をたすけんとする心にや。さてもさても、人間の忠臣とても及べからず』

とて、感涙をながして犬に恩義を厚く謝し、かみころしける子犬は菩提所の寺に葬りぬ。

浩^かりし後は彼犬、昼夜つきそひて、偏に乳母^{うぼ}のごとくにかしづきければ、子は又、母の思ひにや、乳房^{ちぶさ}をふくんでむまく睡^ねり、或^{あるい}は遊戯^{あそびたわぶれ}などして些^{すこし}も泣事^{なく}なかりければ、阪助、今は家人の思ひをなし、我子を犬にあづけ、おき心なく紙屑買^{しりしめ}にぞ出にける。いつ

も朝出る時は、「又留主をたのむぞよ」とて、犬の首^{かしら}を撫^なさすり、戻^{かへ}りには鮮^{あざなけ}き魚買^{うし}来りて彼犬を馳走^{ちそう}奔^{ほん}する事、斜^{なめ}ならざりける。

実^げや、嬰兒^{えいじ}の生長する事、日月と共にはやく、七月^{なな}のなげずへ、這^ほほどになり、八月もたち九月^{このの}にもなりぬれば、もはや乳^ちなきとても育^{そだて}あがるべく、阪助、殆^{ほとん}ど心をやすめておもふやう、

『これといふも犬の大恩。我子の為なればいかにもして食物余り有やうに』

と、日夜稼^{かせ}といへども、兎に角にまわり合せあしく、ある日、大坂中をまわりて些^{すこし}の屑^{くづ}をも買出さず、暮に及て高津^{こう}の五右衛門町を通りけるに、奥床^{おくど}しく住なしたる家の内より若侍^{わかしら}立出て、

「紙屑や、売やるべし」

といふに、阪助、そのままた三十二文に件^{くだん}の紙くずを買とり、その日は是を限りとして我家にぞ帰りたりしが、わづかの紙屑ながらしらべ見ける中より、何やら反古^{ほうこ}につつみたるもの出たり。阪助、つつみを解^とて

開き見けるに、凡十両の金子なれば、阪助、『こわこわいかに』と肝を潰して大に呆はてしが、元来正実無慾のものなれば、空怖しく思ひて振り出し、

『是は、かの侍、鬧しきに取まぎれ、此金子を紙屑の中にまぎれこませしものならん。もし主人の金子などにて紛失なしたる事ならば、かの侍、いかばかりか難義やすらん。何はともあれ、かかる大金を我身分にて所持なさば、人の疑ひかかりて後難の程もはかりがたし。さらば片時もはやく返すべし』

と、件の金子を元のごとく紙屑の中に入れて、急ぎ五右衛門町のかの家に到り見れば、はや明家となりたり。

阪助、甚だ不審に思ひ、隣の家にて聞に、

「かの家は貸坐敷にて、あとの月より武家方と見へて旅宿に借られしが、俄に今日、引はらひて乗船いたされたり。ただ西国方の侍衆とばかりにて、名をも所をも知り候はず」

といふに、阪助、いよいよ駭れ、かの金子を持あましつつ、『こわいかがせばや』と思ひわづらひける

が、此五右衛門町に鼠忠治といへるものあり。人々、鼠の妖術を使ふといひふらせしゆへ「鼠」と綽号せり。何の経紀といふ事もなく、料をむさぼりて人の証人などにたつ事をなしければ、曾て阪助、縁者にはなけれども、家を借る時、証人に憑たるものなれば、『先、忠治に語りて相談せばや』と立寄に、おりよく忠治、家に居あわせて、阪助がしかじかのものがたりを聞て、忠治云けるは、

「それは思ひがけざる仕合かな。聖人も『天の与ふるをとらざれば却て罪せらるる』といへば、其金は所得として些もくるしからざる事なり。さして大金といふにもあらねば、後日の沙汰あればとて何ほどの事あらん。我、よきやうに計らはんほどに、かならず人に語るべからず」

と申ければ、阪助、忠治がことばにすこしは『さりとも』と思へども、猶、心易からずして、

『忠治、「人に語るな」とは申せしかど、後日の為なれば、つつまず近隣の人には語りおくべし』

と思ひ、壁どなりに一人住ける願西といへる道心者の家に立より、件のありやうを語りければ、願西、聞て打わらひ、

「金を拾てさのみ苦勞の事にもあらねど、正直一遍の心からは天道を恐るるもさる事ぞかし。さればとて、其金の主、西国方の侍とばかりにて、いづくをあてに尋ゆき、もち行やらんやうもなし。却て其主より尋来べきはづなれば、先、いづれにも其金子は人の心つかざるやうに仏壇のうちにとくと収おきて然らんと申しければ、阪助は金子を携て家に帰り、願西がおしえのごとく金子を仏壇のうちににおさめ置しかど、『あら、よしなき金の番人や』と、其夜は心の愁となりて夢もむすばず、朝とく起出たる所に、かの五右衛門町の証人忠治来り、

「いかにや、阪助。金を拾ていかにくろう顔なる可笑さよ。それはさておき、我亡父の年回にあたりたれば、心ばかりの重のうちをこしらへし」と

とて、一重の牡丹餅を贈物として与へつ、そこそこ

にかたりて、「又、外々へ」とてぞ出ゆきける。坂助はまづ忠治があたへし牡丹餅を仏壇にそなへつつ、かの金子を見るに付、持出んもきみあしく、又、残しおかんも心がかかり。『頼まいらするは如来なり』と、一心に念じけるは、

『我、金子を盗るるをおしむにはあらざれども、今にも持主に出席会议時、償かへす力なければ、ひとへに留主の要心、金子の守護加護あらせ給へ』と念じおわりて、扱、立出んとしたりしに、かの犬、阪助が裾をくわへてしきりに引とどめければ、阪助、此やうすを見て、

「いつより打しほれて見ゆるは、さては心あしきにや。我も家にありたきものなれども、さるにては今日を送りかぬるなり。よしよし、帰りにには小豆を買きてたびてん。かしこの仏壇には金子あれば、留主の戸に盗人の用心、くれぐれもたのむなり」

とて、頼て立出ん「と」しけるに、いかがしけん、天秤ふつと中よりおければ、何となく心のかかりの

前途かなひにて、後のあはれとしら紙の恩を反古ほんこの買出しに荷かたを引担かたげてぞ出行ける。

○鼠の偷ぬすみ

爰ここに隣家となりやの願西ぐわんさいは、元来亡頼ぶらいの悪徒あくどなりけるが、壁に耳をつけて阪助が今つぶやきしを聞すまし、るすの間ひまを見こみ、表の戸は鎖くさりあれば、おのが縁えんの下にくぐまり入、床下ゆかを忍びやかにつたひて坂助が住居の内にはひ出し処に、かの犬は兎こに乳を含めて睡ねゐけるが、願西が怪しきていを見るより吼ほたける声つねならず。願西、「人や知る。妨さまたげすな、畜生め」と謾みだつつ、仏壇を見れば牡丹餅ぼたんもちを備へてありければ、『これおぞ口どめにとらする』とて牡丹餅を与へけるに、かの犬は見向もやらずいよいよ吼募ほへのる。願西は難なく金子の財布を首にかけて、『さらば我も相伴しやうばんせん』とて、牡丹餅を一口に喰くらひ、既に縁えんの下に逃入らんとする所を、かの犬、吼怒ほへいりて飛とかかりければ、願西、「しや、畜生め」と、有あふ捺刀なたをおつ取て、ただ一突つきに

突ければ、犬は胴腹どうはらを突きぬかれ、一声叫さけび即坐すぐざに死ししてけり。願西、「哈が々」と打咲うちわひ、

「おのれ、牡丹餅もくらはず、あたら命いのちを捨すてつるよ。我われ又、最も一ツくらふべし」

と、かの牡丹餅をとつてくらひけるが、忽たちまち口中より鮮血くろち夥おびただしく迸ほとばしりて、牡丹餅を生しょうに吐出し、五骸たいし麻しれて打へたり、声もたたず、ただ目を白くなし黒くなし、七転八倒してのたうち廻り、ひとり苦しみ死に死たりける、自業自得むくひの報の程ぞ怖おそしき。

此日、阪助は黄昏たそがれになりて我が家に帰りけるに、兎この怪有けうとき啼声なきに、『何事ぞ』と急ぎ戸を引明て見れば、願西は血を吐はて死、犬は突殺され、共に事されて見へければ、阪助、大に駭おそろき、

「すは、大事おこ発りたり。」

と騒さわぎたつるに、相借家の者ども馳集はせあつり、此有こさまを見るに、願西は阪介が所持の金財布ざいふをゑりに懸かけてゐければ、疑うたがひもなく盗に入たるにきわまり、犬は吼ほたるゆへ切きれされたるに相違なく、

「さるにても願西が牡丹餅を喰ひ、血を吐て死たるを
みれば、此牡丹餅には兼て大毒を入おきしと覺ゆ。何
さま牡丹餅にこそ仔細あるらめ」

と僉議するに、

「此牡丹餅は今朝、五右衛門町の忠治が持来れり。さ
ては阪助を毒餅にて殺し、阪助が為には借家の証人
なれば、家財、金子ともにおのが方に引取べき忠治が
巧と知られたり。さらば鼠忠治を捕来らん」

とて、四、五人の壮者ども、五右衛門町に到りけるが、
『もし、とりにがす事もや』と、表にもひかへさせ、先、
何気なく一人内に入て、

「忠治。用こそあれ。来れ」

とて、手を引立てるを、忠治、「心得たり」とてふりは
なしければ、一人、つと寄て後抱に無手と引組、捻
倒さんとし、又一人、足を提て引倒さんとなしけるに、
不思議や、忠治がその骸、煙のごとくすらすらと脱出
て、つかつかと柱を登り梁をつたひて、其形、忽
ちかき消ごとく失にけり。人々、『こわいかに』と怪

みつ、ただ茫然と呆れはて、外面にひかへし者も、
「表より戸を引立たりしに、いづくより逃出けん」
と商議するに、ただ鳴居の下のがしより鼠出て逃
走りしを見たるのみなりしが、

「さては、忠治、鼠の幻術を使ふと聞つるが、隠形
の術にて人の眼をくらまし逐電なしけるものならめ」
と、人々奇異の思ひをなし、いよいよ忠治と願西が悪
事かくれなく、聞人、にくまざるはなかりける。

阪介はかかる事をば思れず、あわれ儂なげきに
て、犬の死骸をば檀那寺に送りて、前頃埋たる子犬
の塚に葬りて、累七の弔ひ、最懇に當けるが、
犬に別れてより大ひに力を落せしかど、思ざるに子は
はや乳もいらず、日にまし生長して、名をも犬太郎と
号たりしに、元来、陽獣の乳汁を飲けるゆへにや、
精氣逞しくおひたちて、既に七歳にもなりにけり。

阪介、我児は健に生立しかど、其身、近年いつと
なく手足痿しびれて起臥自由ならず、おのづから世の
営もなりがたくして、遂に親子、人の門に立てつかれ

乞おどしたりける。知るものども、阪介が行歩かな
ひがたきを、幼少の犬太郎、孝行に父を介抱なしつる
をあわれみて、膝折車をこしらへてあたへければ、犬
太郎、これよりして父を車にのせて大坂の街巷を曳
ありきつつ、節おもふ念仏をうたひ、或は住吉海道
を栖としてゆききの人に袖をひろげけるに、犬太郎
身には襦袢を纏へども、目秀、眉清にして手足拙
からず、色あくまで白く、玉を欺く容貌なれば、見
る人、魂を失ひ恍惚となりて一銭二銭の好力（合力）
せざるものはなかりける。

そのころ住吉海道の綱手車とて、人々あたふる銭は、
その日の糧にあまり、阪介、なかなか楽隠居の思ひを
なして、身は非人たれども何に不足もなかりしが、ふ
と冒風の心地より次第に重り、湯水をだにききいれず、
今はたのみすくなく見へければ、阪介、犬太郎にむか
ひ、涙をながして申けるは、

「我、もはや此度が暇乞と覺るなれば、你に申おく
事あり。你が母は、産おとすと即時に何者とも知れず

殺害にあふて、あへなき最期をとげたり。你、無念と
思ひ、いかにもして生長なさば、母が敵を討て修羅
の妄執をはらさすべし。二つには、我所持なしつる十
両の金子を你にあづくるなり。此金子は元より我金子
にあらず。主は誰ともしらねども、上包の反古に讃
州寒川郡小豆島と書つけあり。你、これを手がかり
として讃岐にくだり、金子の主を尋出し、此金子を送
り帰しくれよ。さすれば我、草葉のかげにての喜び、
此うへやあるべき。此金子は人の宝とぞ思ひ、此年月、
誠に貧苦にせまり、身を投、首を縊て死なんとまで
思ひつめたる時だにも手をつけずして、かく非人とな
るきわまでもかたく預りおきしなり。今、此金子にて
大人参を用ひなば、千に一つ、たすかる事もあるべけ
れど、我命にかへても此金子を持主に送りあたへたき
存念なれば、かならず父が本意をわするる事なかれ」
とぞ語りければ、犬太郎、つくづく聞て、

「母の仇は、天に昇り地をくぐりても尋出して本望を
達し申さんが、ただ悲しきは父の病ひなり。譬、道

ならぬ金にもせよ、命にかへる宝やあらん。何とぞ其金（にじん）を人（ひと）参代（さんだい）に立替（たが）て、今一度本腹（はぐ）（本復なし給れかし。我身（わがみ）もはや生（な）長（なが）なせば、いかなる艱難（かんなん）をもいとはず、辛（くる）き苦（くる）みをなして十両（じうりやう）の金をば償（つぐ）ひ、其主（そのしゅ）に返し（かへ）まいらすべし。天（あま）にも地（ち）にもただひとりの父（ちち）にはなれまいらせ、我身（わがみ）は誰（たれ）を力（ちから）になりゆく事（こと）ぞや」

と、涙（なみだ）をはらはらとながして申（まを）ければ、阪介（はんけい）、以ての外（そのほか）に腹立（はらだ）し、

「你（なんぢ）、さようの不甲斐（ふがひ）なき心底（しんぞこ）にては敵（かたき）を討（う）つ事（こと）も覺（おぼ）束（つか）なく、又、金子（かねこ）も何（なん）とかすらん。我生涯（わがしやうがい）、かりそめにも非道（ひどう）の慾（よく）をなさざれば、父（ちち）こそかく路頭（ろだう）にさまよひ死（し）するとも、天道（てんどう）憐（あわれ）み給（たま）ひて、子孫（こそん）はかならず栄（えい）花（は）なるべし。你（なんぢ）、相（あい）かまへて人の物（もの）をむさぼる心（こころ）あるべからず」

と、くれぐれと教訓（きょうくん）なしければ、犬太郎（いぬたろう）は父（ちち）に吃（しか）ち（叱）れて打（う）しほれ、泣顔（なみだ）を見（み）せじと、

「さらば延命散（えんめいさん）をととのへ来（き）りてまいらすべし」
と云（い）つ、泣（なみだ）に出行（い）けるぞ哀（あは）れる。阪介（はんけい）、うしろか

げを見（み）送りて、『これ、今生（こんじやう）の別（わか）れぞ』と、親子（おやこ）の名（な）残（のこ）おしまれて悲歎（ひたん）の涙（なみだ）にくれけるが、

『かわいや、犬太郎（いぬたろう）。ひとりの親（おや）にはなれなば、道のほとりに寝（い）臥（ふ）して、もし、犬（いぬ）にや嚙（か）まれやすらん。さりながら犬太郎（いぬたろう）が孝心（こうしん）、天（あま）にとどき、ゆくさきを守（まも）らせ給（たま）らん。我（わが）ははや、定齋（じやうさい）などの薬（くすり）にて、所詮（しよせん）いきのぶべき命（いのち）とも覺（おぼ）へず。なかなか死病（しびやう）と思（おも）ひあきらめたれば、犬太郎（いぬたろう）にも長く苦勞（くらう）をさせ、断末魔（だんまゐ）のくるしみをを見（み）せんよりは、一刻（いこく）もはやく往生（おんじやう）を遂（とぐ）べし』

と兼（か）て覺悟（かくご）はなしながら、我子（わがこ）の輪廻（りんゑ）にひかされておくるる心（こころ）を觀念（くわんねん）しつ、終（ついに）に舌（しほ）を嚙（か）めてぞ死（し）けるは、哀（あは）れなりし事（こと）どもなり。犬太郎（いぬたろう）は斯（かく）ともしらず、急（いそ）ぎ薬（くすり）をととのへて歸（かへ）りけるに、父（ちち）が最期（さいき）の有（あ）さまを見て何かは駭（おどろ）かざらん。はや事（こと）きれたるを見て、天（あま）に焦（あこ）れ地に叫（さけ）びて、歎（なげ）きはいはん方（かた）もなく、目（め）もあてられぬ次第（しだい）なり。浩（か）りしかば近辺（きんぺん）のものども、犬太郎（いぬたろう）をなぐさめすかし、父（ちち）が死骸（しかい）をば大坂（おおいさか）の檀那寺（だんなでう）におくりやるに、犬太郎（いぬたろう）、なくなくも野辺（のべ）の送り（おく）りの哀（あは）れを見（み）聞（きこ）人（ひと）、

共にあはれをもよふしけり。

粵に一個の武士、犬太郎が為人を鑑定して良人に取挙げしが、望あるに任せ、泉州堺にかくれなき万人敵見竜と号する兵法者の家に奉仕させけるに、犬太郎、此家に七年余り勤仕私なく、些の暇あれば寢食をわすれて日夜兵法芸古怠りなかりければ、天性の才機を発し、百折千磨の妙を得たり。見竜、しきりに犬太郎を賞して申けるは、

「それ、一隻の犬、多勢の犬に四角八方を取囲れたる時、双眼を配て敵にむかひ、必死の身を構たる光景、なかなか四方八方に些の間もなきものにて、兵法の妙、ここにあり。犬太郎が精神、かの犬にひとしく、名詮自性の理りなれば、以来、八角犬太郎と名のるべし」

とて、既に十五歳の春に一流の秘伝を残らず授り、印可をもゆるされ、双ぶ方もなかりける。

然るに犬太郎、ある夜の夢に父の阪介、眼に血の涙をそそぎ、怒の面色にて、

「你、はや十五才にもなりつ、いまだ母の敵をも討ず、金子をもいまだ帰さずして、父が妄執となれり。はやや四国に渡って大望を遂べし」

と見て夢さめぬ。犬太郎、打驚き、

『げにも我、十五才にも及びて父母の宿願を達せざるは、大丈夫のなす所にあらず』

と、見竜にも密意を告て暇を乞、俄に旅装し、夢の告にまかせて四国遍路と志し、住の江の岸より便船して、さして行衛もしら波の旅路にこそは趣ける。淡路島かよふ千鳥の啼声も心に須磨や明石潟、波の枕のうつつにも、敵にあはば大物の浦、和田の御崎のゆくさきに、いつか本意を達しなば、音にひびきの灘なれや、名も高砂の浦風に、真帆の追風も日数経て、讃岐国丸亀の港にぞ着にける。

かくて犬太郎は、船をあがりてまづ象頭山に参詣し、毘羅大権現に祈誓して、一つには敵の行衛を尋ん為、二つにはかの金子の主を尋ん為、三つには父母菩提の為、四国へんと志し、わけて此讃州は弘法大師

誕生たんじゆうの地なれば、国中残るくまなく回り、それより伊予、土佐、讃岐の靈場れいじやうを悉く順礼して四国遍路を打納しかども、遂に敵にもめぐりあはずして、本意なくも夫より備前の国、児島が崎に渡りけるが、四国の難所に足を損ぜしが、今は一寸も引がたく、八浦といふ所に行悩ゆきなやみて、漁士の家に舍りしに、あるじの老婆ばば、懇ねんころに勞り、心ならずも数日足を休めけるに、この家の養子なる漢おとし、すすめて云けるは、

「旅人、長の旅をひかへて歩行かなひかたくては、最いたわしき事なり。ここに妙たふしやくあり。洋中の湖うしほ（潮）にて足を洗ふ時は、立地たちぢにいかなる痛をも愈いやす事、妙なり。いざ我背まなに負おおて伴ひ申さん」

と云に、犬太郎は大に喜び、かの漢おとしのいふにまかせて、やがて出崎にいたりけるに、浜辺に有つる漁舟いさりにとり乗のてはるか沖に漕出こせせしが、誠に落涙あをうなばらびやう渺茫せうぼうとして巨濤逆浪おきなみさかなみものすさまじき所にぞ到りけるが、

「ここぞよき汐うしほなり」

といふに、犬太郎、何心なく足を海に浸さんとする所

を、かの漢、賊くわいをおつとつてさんざんに打すへけり。此時、浪あらく、舟ゆらめき、目眩くらめき、腰膝こしひざたたざれば、尚もしたたかに打すへらる。犬太郎、勇力勝ゆうりきすぐれば、軽捷はやわざに達したりしかども、疾やまひといふ大敵にはかなひがたく、手をむなしく、只、「無念、無念」といふて身をあせるばかりなり。かの漢は、又、たぐ縄を以て犬太郎が骸からだをぐるぐると簀巻すまきになして、「呵々からから」と笑ていふ。

「只今、你を海に打込で魚腹うをのはらに葬ほうむらするなれば、最期の引導にかたり聞すべし。われ、元來、かの家に養子となりつるは、婆ばばが十両あまり金子を持たるを見こみ、『いつぞは奪取うばひとりんものを』と計れども、其ひまを得ざりしに、你がとまり合せしこそ幸さいわひ、我、婆ばばを縊殺しめころして金子を奪うばひとり、あなたが殺して金子を盗ぬすみ逃にげさりしにもなして、あなたが骸からだは海の底に沈しづめてしまへば誰たれしものなく、家財もろとも我物になし、後日の災わざわいもなく、これ、我身を全まふする計略なり。いかに首尾好機しゆびよきからくりならずや」

といいさま、足をあげてはたと踢倒たり。犬太郎、
舷に倒れ、既に海にのぞみて思ひけるは、

『我、今は命のきわなれば、所持の金子を以て此奴に
託なば、金子もてうど十両なれば、聞とどけて命をた
すける事もあらん。さすれば我本望もむなしからず、
かの婆が命をもすくふべし』

と思ひけるが、

『いやいや、此金子は人の物なりとて、父、義を金鉄
に守り、いまはの人参代にさへ用ひずしてまざまざ親
を見ごろしたる金子なるに、子として今、その金子に
て命たすかるは道にあらず。ともかくにも不運の末
なり』

とあきらめ、眼を開て観念をぞなしけるに、此時、
かの漢、そろそろと碇を以て犬太郎がからだの重石
となし、やがて渦まく浪にざんぶと打こみたりしは、
無慙なりける次第なり。

○猫の仇

此時、犬太郎は千尋のそこに沈しが、嗚呼、孝心、
天に感じ、海の底までも通じけん、いかがしてか縄切
て碇はしづみ、骸はすらすらと波の上に浮み出たり。
犬太郎、元来水練は得ざれども、『かしこの島につか
んものを』と、

『八大竜王、憐みを垂て、昆比羅大権現、擁護の力
をそへさせ給へ。南無大師遍照金剛』

と一心不乱に念じつつ、遊ぶともなく浪にゆられ、浮
つ沈つして、不思議や、一ツの島にぞ打あげられけ
るが、犬太郎、やうやう波打際にはひあがりて、『い
かなる地ぞ』と見るに、日くれ、東西もさだかなら
ねども、幽に火の光の見ゆるを目あてとして、右に
倒れ左に転つして足をくるしめ、辛じてだとりつき
て見れば、前門惣堀を構へて、家蔵たてつづきたる
その結構、いづれにも長者の屋敷と見へて、一人の下
僕たたずみあたるに、犬太郎、

「何と申す所ぞ」

と問ければ、かの下僕、あやしみていふやう、

「此所は讃州寒川郡のうち、小豆島といふはなれ島なるに、旅人、いかがして此所には来つる」

と咎るにぞ、犬太郎、小豆島と聞て大きに喜び、

『かかる大家にたよりてこそ、兼ての金子の主を尋出すに便宜よからめ』

と思ひければ、先、日くれ、行なやみし事を語り、一夜の舍りを頼みけるに、かの下僕、頭をふつてうけがはざれば、犬太郎は児島崎の危難を語りてひたすら歎き申ければ、かの下僕、気の毒あまりて云けるは、「我家は年ごろ後家持にて、慈悲ふかく、報謝宿などもなしつるが、いかなる事にや、後家御前、近ごろ心あらあらしくなりて、邪見非道なる事、詞にはのべがたし。其身、この島の長者と敬れながら、人に一銭のたすけをも嫌へば、なかなか修行者などをとどめ、一飯の施しはなりがたし。それゆへにこそ、宿しがたしと申たり。かく邪見にて下々の咽まで干ながら、其身は栄耀喰を好み、いづくよりか同じ婆たちを

引入て、昼夜酒宴のあいてとなし、坐敷は肴だらけに取ちらし、舞踊て娛めり。こよひも踊りあれば、そのまぎれに一夜を明させ申べきが、いづくにても苦しからずや」

といふ。此時、さしもの英雄も精心つかれはて一寸も歩みを運ぶ事なりがたくして、犬太郎、

「軒端の下になりと恵ませ給はるべし」

といふに、かの下僕、「いざ、さらば」とて、犬太郎を木部屋の内にいざなひしが、

「旅人、殊の外に病つかれて見ゆるなり。嘸かし難義の事ならめ。本国はいづくにや」

と問ふに、

「大坂なり」

と答ければ、かの下僕、是を聞て、

「大坂ときくも怖しや」

とて、涙をはらはらと流しければ、犬太郎、不審し、「何ゆへ大坂をさばかりおそれ給ふぞや」

といふに、かの下僕、

「さる仔細あり。語りて聞せ申べし。我、元來、さまでの下臈^{しもろ}にてもあらず。此島の守、菊地兵庫頭政明公に仕へたりし侍^{さむらい}たりしが、十五ヶ年以前、主人に供奉^{くぶ}して大坂に登り、五右衛門町といふ所にしばらく滞留^{とまりう}なし、発足の日、事繁く、用金十兩を失ひたり。いかに捜せどもいかいこれに見へず。殊に用金の内なれば、不足なしては何とやらん後めだく、申訳も立がたく、既に『切腹せばや』と思ひし所、主君、情厚^{なさけあつ}く、何となく暇^{いとま}を給はりたり。我、それより此家の下部となりつ、年々に給銀を残したため、『いかにもして主恩の金子を償^{つぐな}ばや』と思ふに、とかく多病打つづきて費用多く、薪水^{しんすい}の苦みもむなしく、わづか十兩の金子調^{しらひ}かね、今に本意を達せず」

と首をなげて語る。犬太郎、始終をきくに、亡父^{ぼうふ}の語りおきし言^{こと}ばにひしと符合しければ、

『さては此人、其節、父に紙屑^{わかしらひ}をうりし若侍^{わかさむらひ}なりけるよ』

と大に喜び、何気なき顔して、

「何にても証拠はなかりしにや」

と問に、かの下僕、

「証拠とはなけれども、そのせつ、上包^{うわづつみ}の反古^{ほんこ}に主人の自筆にて『讃州寒川郡小豆島』と書つけありし」といふ。犬太郎、此ことばを聞いていよいよ心の疑^{うたがひ}なければ、此時、懷中より件^{くだん}の十兩の金子を取出して、云云^{しかしか(ママ)}といふに、かの下僕、金子を取て上包^{づつみ}を見るに、主人の自筆にまぎれなかりければ、

「こわいかがして十五年の間、その節の上包^{うわづつみ}のままにて、かくは有し」

とて、甚^{あま}呆^まはてて不審をなす時に、犬太郎、十五年以前、父の阪介、五右衛門町にて紙屑^{わかしらひ}を賣ける中より此金子を拾ひ出し、臨終のきわまでも所得とせず、父が遺言によりて此年月、金子の主^{ぬし}を尋めぐる事をつぶさに語りあかし、件^{くだん}の金子を与ふるに、かの下僕^{おとし}、さらに喜びずして、金子はかたく請^{うけ}ず、只、

「阪介親子が厚志のほど、感ずるにあまり、ことばにものべがたし」

と、只管涙をながし、一札をくりかへして申せしかど、なかなか金子は辞退して、いかなかな受ざれば、犬太郎、不興して云けるは、

「さある時は亡父阪介が信節もとどかず、十五年、心を尽せしかひもなく、我も親の遺言に背き、人の宝をあづかりて何の益かあらん」

とて、歎息　なしければ、かの下僕、気のどくに見へて、

「さまでのころざしをむなしくなすにはあらざれども、一旦、我僦忽にて失ひたる金子を、十五年の星霜を経て胡乱に取もどすいわれなし。去にても、御身親子は実に世に珍らしき義士孝子の人なれば、事の由を兵庫頭殿に訟へ、いづれにも裁判にまかすべし。まづ、定し飢給ふならめ」

とて、そのまま出さりしが、頃刻ありて食物を携来り、

「とくにもまいらせんと思ひしかど、我家は吝にして、下ざまの食物もみな盛きりにてあたへぬれば、

些も残り有る事なし。殊に此小豆島は小豆のみ多くして、常に小豆のみを朝夕の糧とす。此小豆粥は我夕氣(夕餉)の糧にていかなれどもまいらすなり」とて、一椀の小豆がゆをあたへ、

「明日ゆるゆると語るべし。はや、やすみ給へ」

とて出さりぬ。犬太郎、此時、甚だ飢に望(臨)て絶かねければ、かの下僕の志を『かたじけなし』とし、件の小豆がゆを食しけるに、百味の飲食はいざしらず、此小豆の味ひ美なる事、まことに天の甘露といふともかくは有まじきとぞ覺られける。

然るに此小豆を食しおわりけるに、何となく惣身ゆるや(か)になりて、勞しきを忘れ、心すみや(か)になりける。折しもあれ、外面に人のものがたる声しけり。『何事やらん』と、戸のすきまよりうかがひ見れば、黒白の大二隻のみありて、あたりに人かげもあらず。此黒犬、人の言葉のごとくにて云けるは、

「白よ。今、あなたが家の奥蔵に盗人忍び入たり。你、何とて吼知らせざるぞ」

といふに、一隻びきの白犬、又、人のことばにてもいいけるは、

「黒よ。すておくべし。われは此家の門前にはあるなれど、あるじのばばけんどん、慳食けんじきにして、魚の骨すらあたへず。いささか飼養かひやしなはれし思もなければ、しらすするに及ず」とて、此二隻の犬の声、誠に人のささやくごとくにて、大太郎が耳にありありと聞とりしかば、我ながら奇異きぎ希有けうの思ひをなして想ひめぐらすに、

『我、幼稚ちうじのみぎり、犬の乳汁をのみてかく生長なしたれば、自然と犬の精血をうけつぎ、今、犬のことは聞わけしか。扱さくも又、小豆を食し咽のどを過るとひとしく、年月うれいける大熱、忽たちまちにさめて、心神しんじん朗らかになり、手足全く健すしやかになり、直に平愈たいよくなしたる不思議しぎさよ。それ、犬は陽獣やうじゆうにして冬も熱し、小豆は犬の良薬にて熱をさますと聞つるが、今、立地たちどころに効能を見つる事、これ、ひとへに天の祐たすくる所にして、氣力、平生にまさりたれば、今にてもあれ、敵かたきに出会しゆつわいせば、手なみを見せんず事、いとやすし』

と、踊りあがりて歛よろこびける。

さて、『盗人をすておくべきにあらず』と、ひそかに厨だいてうにいたりて、かの下僕しもおこに告しらせければ、急ぎ家内の者を集めて、数人、奥蔵にいたりて見るに、はや、盗人見へざれば、『もし、かくれある事もや』と、天井あるいは縁えんの下、残るくまもなくここかしこと捜し、『もはや跳にげさりし』と皆々いふを、婆ばば、呵々からからと打わらひ、

「我等は眼の見へぬ奴原かな。盗人こそかしこの梁はりの上にかがみあたり。」

といいつつ、はたと睨にらつきたりしが、忽ち梁の上より大の漢おとこ、墜おちと落たりしかば、「すわや」とて、大勢おりかさなりて高手小手に縛いましめければ、主の婆ばば、盗人をしかりていふやう、

「われは是、昼寝ひるいねて夜はねぶらず飲唄のみうたふてさわぎあかすともしらずして、のめのめと来りつる愚おろかさよ。よしよし、やがて我手料理になすべし。それまで木部屋つみやに繋つなおけよ。あら心地よや。よき肴さかなをもふけしぞ。

さらば又、一献をもよふすべし」

とて、即、坐しきの内に入れば、家人らは盗人を引立て、木部屋の内につれ行、柱に縛りつけて出さるぬ。

此時、大太郎は木部やの内、ともし火なく、黒闇の中にありしかども、此盗人の面ありありと見へつるに、是、今日しづめに懸し件の漢なれば、

「你、われを見しるや」

とことばをかくるに、此盗人、大に驚天し、

「御身、よくかかる黒闇の中にて眼見ゆるにや」

と不審す。

「你也又、いかがして眼見ゆればこそ、我面を見るにや」

と大太郎に問詰られ、盗人、くるしき息の下よりも、

「我、かく袋の中の鼠と成たれば、命のきわに何をかつつまん。罪障懺悔の為、語り申さん。われ、元来、

鼠の妖術を使へば、黒闇の中においても眼光すきとおりに見へざる事なく、夜盗に妙を得し鼠忠治と

は我事なり。十五ヶ年以前は大坂五右衛門町にすまひけるが、牡丹餅に附子砒霜の毒をしこみ阪介といへるものを殺害し、十両の金子を奪とるべき奸計露れて、大坂をば影をかくしてにげ下り、それより四国、九州、盗賊をせざる所もなく、備前の児島におしわたり、海士の婆が金持たるを見こみ、偽りて婆が養子となりゐたるなり。今日、御身を海にしづめ、事を計らんとなしつるに、折あしく人に見とがめられ、手をむなしく此島にわたり、大金を盗取らんと此家の蔵に忍び入、鼠の術を行しゆへ、数多のものの、我を見つけたざりし所に、主の婆、われを見出し睨つけたるその時の怖しき、瞳の光り、射るがごとく、われ、一縮となりて梁にたまり得ず、覺ずにらみおとされたり。猫に鼠のあふごとく、喩にひとしき口おしさよ。そも、鼠の妖術といふは、よく人の眼をかすむれども、ただ猫の眼を掩ひがたし。われ、此隱形の術によりて、年来不覺をとらざりしに、わが術を折しかの婆は、よも人間にてはあるべからず。まさしく変化魔性の

たぐひならん。さるにても、われ、よしなき妖術を覚へて、ついに命を果すなれ」

とて、さしもの強盗も首を投てかたるを、犬太郎、一々聞いていただけ高になり、

「われはこれ、あなたが今申せし阪介が一子、犬太郎なり。

你、よく我親を毒害せんとし、われをも又、しづめに懸たるよな。你、さまざまの悪事をなし、数多の悪党ばらに交れば、我母を殺害なしける敵の行衛をしる事あらん。すみやかに申べし」

とて、刀をとつてむねうちにりうりうはつしと打すゆる。盗人は打れて、

「しばらく待給へ。われ、心づきたる事あり。命をたすけ給はば語り申さん」

といふに、犬太郎、しばらく思案して、

「われ、書を見るに『前漢書』に『怨を報ずるに恩を以、厚く薄望に施す』といへる事あり。『老子経』『法苑珠林』『鶴林玉露』をあわせ考るに、怨を報ずるに恩を以すること、又、徳の一つなれば、しな

よりてゆるす事もあらん。我父はあなたが為に毒害にあはんとしてまぬかれ、われも海中に沈みてたすかり、你、養母を殺さんとしてささわりあつて害せざれば、則、其身を害せざるなれば、今、我母の敵をさへ告しらさば一命をたすくべし」

といふに、かの盗人、声をひそめていふやう、

「われ、十五年以前、御身の母横死のみぎり、死骸を見しに、惣身に歯がたありて喉を嚙ころしたるやうすなり。『なんぞ人のかみころす事あらん』と怪しみおもふに、年ごろ家に飼れたる三毛猫あり。其日より行方しれず。われ、ここにおいて四相を觀ずるに、件の猫は年経る妖猫にて御身の母をかみころせし事をさとしたり。今宵、此家の婆を見るに、件の三毛猫の所変にて、御身の母の敵といふは是なるぞ」と語るを聞とひとしく、犬太郎、勃然として怒を發し、拳をにぎり齒をくいしばり、

「さては我母の敵は人にてもあらず、手飼の畜生なりつる口おしさよ。げに、まこと猫は魔性にて仏性な

きがゆへ、^{しやくてんねはん} 祇尊涅槃の時、^{むじろまんおく、きんじゅうら} 無数万億の禽獸等大会の中にも猫の一種は除れたり。たとへいかなる変化魔王^{わう}たりとも恐るるにたらず」

と、直^{ただち}に身づくろイをなして木部屋を立出、はるか奥庭にいたりて柴垣のかげより坐敷の内を覗き見れば、いまだ酒宴の最中にてさわざめたり。犬太郎、眼^{まなこ}を定てつくづく見れば、こわいかに、主^{あるじ}の婆^{ばば}と見へしは丈五尺あまりの大猫にて、又、いづれも年経る猫^{ねこ}までも数十隻^{すずびき}、みな頭^{かしら}に茜^{あかね}の手拭^{ぬぐい}をいただし、二股^{また}の尾をふり立、手をたたき拍子^{ひやうし}をとりて踊りく^るいゐたり。

犬太郎、此ていを見て大にあきればてけるが、『さるにても、主^{あるじ}はかかる変化^{へんげ}なりとも、いまだ家内^{うちうち}のもの知らざるや。我は是、犬の精眼^{せいがん}なるゆへ、猫の所変^{しよへん}を見出したると覺へたり。いで、畜生めら、目ざましくれん』

と、長船^{おさふね}の一刀をぬきはなし、坐しきの内に踊り入、四方八方に薙立^{なぎだて}、切はらひければ、数多^{あまた}の猫ども、皆

手^てを負^おて吼^ほ叫^{けい}び、四方にはつとにげちりたり。其時、かの大猫、眼^{まなこ} 焔^{えん}きて百鍊^{ひやくれん}の鏡のごとく、くわつとひらきし口は耳のねまで裂^さて、猛虎のごとき牙を利立、

「我はこれ、年来^{なんねん}あなたが家に飼^かれ、あなたが母を喰殺^{くらひころ}せしに、你も又、我餌食^{ゑじき}と成に來りたるか」

と、吼^ほたけつて飛かかる。犬太郎、是を聞いていよいよいかり、金剛神の勢ひをなして打てかかれれば、かの猫または夜刃羅刹鬼^{（夜刃らせつき）（あれたる）}のあられたるがごとく吼^{たけり}くるふて、ただ一^{つかみ} 抓と飛つく所を、『得たり』とすりぬけ、ばらりづんど切さげしが、猫また、腰より下を切はなされ、一声「あつ」と叫びしが、猛然として家鳴震動^{やなりしんどう}なし、俄^{にわか}に大雨ふりきたり、一むらの黒雲舞下ると見へしが、犬太郎が髻^{へんげ}をつかんでこくうに引あげんとす。犬太郎は猫またが腕^{かひ}をとつて引おろさんともみあひしが、金剛力を出してついにとつておさへ、むなもとを三刀^{みかたな}まで刺^さつらぬきければ、猫また、雷^{かみなり}のとどろくがごとくおめき叫^{さけび}て死たるは、怖^{おそ}しなんどいふもおろかなりける形勢^{ありさま}なり。

犬太郎、家内の者をあつめて縁の下をあらため見るに、まさしく此家のあるじ老女が死骸出ければ、家内のものは「主の敵なり」と、猫またをす々になしぬ。是より此家を猫また屋鋪とぞ申ならはせり。

そもそも此小豆島は東西九里余の地にして、『古今に珍しき敵討なり』と、犬太郎が功名、一日のうちに高く、菊地兵庫頭の聴に達し、

「犬太郎が孝義勇猛、甚奇異の事なり」

とて、長者の財宝、家やしきとも残らず賜りければ、犬太郎、忽ち一日のうちに大福長者の身となりつ。亡父の本意にまかせて十両の金子を返納しければ、兵庫頭、最初よりの仔細を聞て、殊に感じられ、

「親阪介とやらんよりして、匹父たりといへども仁義は武士に恥べからず」

とて、所領を給はりて武門の数にくわへらる。犬太郎は、『是、ひとへに犬の洪恩なれば』と、大坂よりかの犬の塚を改葬して、傍なる孤島に先祖のごとく祭り、あつく菩提を弔ひける。これよりしてその島を

犬島といふて、今に到る迄、讃岐の海中に残り、此島より犬に似たる石、今に出るといへり。

扱も又、鼠忠治をば死罪一等をゆるして一つのはなれ島にさしおきしが、日数へて餓死をなしぬ。此島、船中より見る時は鼠の形なるゆへ鼠島と名づけ、犬島に并て今にあり。

さるほどに、八角犬太郎正昭と名のつて、四国九州に英名をかがやかし、菊地、大友合戦の時、教度の譽を顕し、其身、生涯ゆたかにして子孫繁昌なしけるも、ひとへにこれ、犬太郎が孝心、天の祐るところなりき。

敵討猫魔屋鋪 大尾

【跋文】

跋

数部大卷すぶたいかんのその中にひつかき足らぬ一冊物。猷けんの仇あだ討うち、忠孝あり。人として忠孝なからんは、忠うちこうが版元ならず。中位ぐちひなりとも覧玉らんぎはば、作者、ねこまの中将ならず、猫ねこの妻つま乞盛ひさかりならばやと云云。

【広告】

村田屋治良兵衛

日本橋新右衛門町

上総屋忠助

戊辰新版 慶賀堂蔵

巷談坡隄庵 曲亭馬琴著 中本三冊

復讐猫股屋敷 振鷺亭主人著 同一冊

函嶺復讐談 感和亭鬼武著 同一冊

〔繡像小説〕宿直物語

式亭三馬著 全部六冊

〔孝子美談〕白鷺塚

十返舎一九著 前後四冊

敵討枕石夜話 曲亭馬琴著 中本二冊

【刊記】

文化五年春正月

振鷺亭主人 著

蹄齊北馬 画

東武書肆

通油町

〔古今奇談〕 紫草紙 〔全五冊〕

〔圃老巷談〕 菟道園 〔全五冊〕

〔国字怪談〕 頃艸紙 〔全五冊〕

劇場訓蒙図会 〔全五冊〕

小野愚噓字尽 全

〔風声夜話〕 翁丸物語 〔全二冊〕

復讐浪速梅 〔全三冊〕

古実今物語 全六冊

三国一夜物語 〔全五冊〕

自来也物語 〔前五冊 後五冊〕